

あけのほし 2013年6月

「与える幸い」

菊田行住

「あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」

(使徒言行録20章35節)

キリスト教では、信者になると様々な奉仕をすることになります。教会堂の清掃だとか、礼拝の時の受付だとかから始まって、中には役員に選挙で選ばれ、教会の運営に関わる責任の重い奉仕もあります。教会は自主団体ですが、その中で動く予算はかなりの金額に達し、その行く末を誤ると、多くの教会員を苦しめることになってしまいます。その予算を満たすための献金も、大切な奉仕の一つとしてあり、教会員はかなりの負担を負うことになります。

このように言うと、教会というところは、負担ばかりが目立ち、なんだか大変そうだと思うでしょう。大抵どこでも、お金を払えばそれなりのサービスを受けることができるというのが普通ですが、教会はその逆で、お金を捧げた上で、しかも奉仕をするところであるわけです。さらに、毎週日曜日に礼拝に参加すると、「今週一週間の歩みを振り返り、神に懺悔しましょう。」などと、牧師に言われてしまうわけです。これだけ聞くと、いったい何でまた、教会なんかに行っているのかということになってしまいます。

「お金を払って、奉仕をして、そして自分の行動に文句を言われる、それが教会です。」というキャッチコピーが浮かんできそうですが、そのような教会に通う奇特な人が存在するのもまた、確かなのです。

そんな奇特な人の中のある人の話ですが、その人は、社会的にかなり成功した人で、地位も、財産も、名誉も、普通なら誰もがうらやむものを、全部もっていました。その人が、何を思ったのか、教会に通うようになり、いずれ、教会員になるということがありました。その人は、特段、家庭が不幸に見舞われたとか、大きな病気を患ったと、というようなことは、何もありませんでした。むしろ、すべてのことが順調すぎて、次にどうしたらよいか分からなくなるといったようなことで、教会に通うようになったのでした。この人のような状況を、一般的には、「中年の危機」と言うそうで、人生の折り返し地点をすぎたあたりで、今までの自分の生き方に、これでよいのだろうかという疑問を持つ人が、多く見られるということなのです。

「自分は本当は、何がしたいのだろうか。」「わたしは死んで、どうなるのだろうか？」そのように、自分が死ぬことを含めて、自分の人生全体に、納得をしたいという欲求が、

生まれてくるというのです。その人も、そのような漠然とした理由から、教会に通うようになったわけですが、ただ、教会に来るようになって、劇的な何かが待っていたわけではなく、むしろ、教会員になって待っていたのは、大変地味な、奉仕の分担でした。今まで、久しくやっていなかった、不慣れな単純作業を、担当することになり、四苦八苦しながらやって行く中で、新しい世界の中での自分を、発見して行くのです。その人は、教会の奉仕をすることで、負担を自らに負うことを通して、他では得られなかった、何かを獲得できたのだと、いうことでもあります。

人からサービスを受けるよりも、自ら負担を負い、他者に仕えるという行為に大きな意味を見出すのが、教会です。他者と関わり、相手に自分の方から合わせて行為する中で、自分の思い通にならない事態にぶつかることになります。その思い通にならないことこそ、大きな転換点を見出すことになるのです。その良い例を、「子育て」の中に見ることができると思います。子どもを育てる時、私たちは、それまで自由に使っていた多くのものを、犠牲にすることになります。お金もそうですし、時間や労力を削り取られ、それまでの自由が、大きく制限されます。そして、それだけ、自分のものを与えたというのに、子どもというのは、自分の思い通りには、ならないわけです。特に、大人とはものの考え方、感じ方が違うわけで、理解しがたく、まるでどこか違う世界からやってきたものかと悩んでしまい、正直言って、できることならもう降参して、逃げ出したいと思うことも、やはり、何度となくあるわけです。そのような中には、上の子は素直で、何でもいうこと聞いて、本当に良い子なんだけど、下の子ときたら乱暴で、言うことを聞かないし、本当に大嫌いだということが、正直、そういうことも出てくるでしょう。ただ、それでも、なかなか逃げだすこともできないし、何とかつきあって、行かなくちゃならないって時に、「どうして、この子は、こんな子なのか」というよりも、「こんな子と、どうやって生きて行くのか」と、考えた方が、やっぱり、いいわけです。思うようにならない、理解に苦しむ子どもを受け入れようとして行った時に、悩み、大変苦しむことになる。しかし、その苦悩は、自分を限界づけている枠組みを、破ってもらえるわけです。できる事なら止めたいという中で、実は相手というよりも、自分というのは、自分か知っているよりも、はるかに不可解で、認めたくないようなところがいっぱいあるのだということが分かってくる。そういう自分を認めて、受け入れるのは苦しいし恐ろしいことです。しかし、そういう今まで自分の奥深くに潜んでいたところをちゃんと見つめて、それを何とか一つに統合して行くことができる。この自分の中の汚いところを発見して、そして、「自分」の中に迎え入れることができる。このことが子育ての副産物として与えられるというわけです。

ここで、子育ての例を出しましたが、独身者とか、子どものいない夫婦は、どうなのかということかあります。それは、それに代わる誰かが与えられる、備えられる、ということかあります。子どもではなくても、逆に親を介護するとか、誰かの面倒を見ることになったとか、自分を必要とする誰かが、目の前にあらわれるということがあられるわけです。やはり、自分のことでは、本気で何とかしようとはならず、他の誰かを助けたい、救いたいと

いう中で、我々は本気になるということがあるわけです。本気で、自分自身のからを抜け出したいと考えるなら、好きなことだけをしているだけではダメで、他の人との関係を考えてざるを得なくなってくる。子どもとか、誰かとか、他の人のことを、自分のこと以上に考える時に、そのことが可能になってくるのだというわけです。そして、そのことを突き詰めて行くと、それは、最終的には、「世界」との繋がりを考えることになってゆくことでしょう。

「受けるよりも、与える方が幸い」だというのは、結局、他者に与えることで、自分も多くのものを与えられるのだというわけです。ここに与えることの幸いを見出せるのだということです。

(河合隼雄「心の子育て」を参照しました)